待降節第一週

２０２１年１１月２８日（年：No.48／伝道開始：No.1456）

※　本日はビサイドチャーチ東京の中継礼拝に参加します。

説教担当：高見澤栄子師
聖書箇所：ヨハネの手紙第一１章１～１０節
タイトル：「現れたいのち」
https://youtu.be/5nVnAILG1C4

《来週の礼拝予定》　聖書：ガラテヤ2:6-10　招詞：詩編118:22-25
讃美歌：94，540　聖歌：609

「詩篇95篇より、考察」

詩篇95～100編は「礼拝用詩篇」「招きの詩篇」としてのまとまりを持ち、礼拝の「招詞」でよく読まれます。神様が私たちを礼拝に招いてくださっていることを宣言する御言葉と言えます。

95篇は二種類の「賛美への招き」を軸として構成されており、前半は「喜びの賛美」、後半は「平伏の賛美」と呼ぶことができます。前半では礼拝において神様と出会える喜びが高らかに歌われており、契約の箱の前で踊り狂ったダビデの姿がピッタリ合いそうです（Ⅱサムエル6:12-15)。「**山々**」も「**海**」も「**陸地**」もこぞって主を誉め讃えるというのです。後半では自らを深く省みて主の御前にへりくだる姿勢での賛美へと移行します。ここではイスラエルの民の不従順の歴史が回顧されており、彼らがエジプト脱出後の生活において再三神様に逆らった経験が綴られています（「**マサ**」「**メリバ**」の意味するところ)。

本篇は輝かしい響きで始まったというのに、最後は「**確かに彼らは、わたしの安息に入れない**」と、不従順なイスラエルへの神の怒りのことばでもって締めくくられてしまいます。本篇との関連の深い箇所としてヘブル3:2-4:11が挙げられますが、この箇所では同じようにイスラエルの不従順の歴史が綴られてはいるものの、「**神の安息に入るための約束はまだ残っている**」「**信じた私たちは安息に入る**」など、希望のことばが散りばめられています。救い主イエスにあって、罪人は安息に入りうるのです。神様が「安息に入れない」と言われたのは、民を悔い改めに導くためのメッセージであり、主イエスの到来を待ち望むことばと言えます。赦された人は心からの喜びをもって賛美をささげることができるのです。